



医薬創製教育研究センター

Institute for Medicinal Research



センター設立と初代の研究室

平成4年度(1992)に、徳島大学薬学部では、地球規模の重要課題である「環境問題」と、本学部の従来からの特色「創薬」という2つの課題に整合性を持たせ、これらの課題に関する研究と教育を担う創薬化学の拠点施設として、附属「**医薬資源教育研究センター**」を設立して、新たに3研究室を設置しました。

・植物環境資源学研究室 → 有機合成薬学分野

植物は創薬原料として人類には欠かせない天然資源です。宍戸宏造博士が初代教授に着任したこの研究室では、植物由来の有効成分の同定や化学構造の決定と、それらの化学的全合成を目指して、有機化学的研究手法を駆使しながら数多くの成果を得ました。平成17年(2005)には研究室の名称を「有機合成薬学」に変更しました。またおよそ20年の間に多くの学部生・大学院生が卒業・修了しました。新藤充助教授は後に九州大学の教授、吉田昌裕准教授は後に徳島文理大学の教授に、それぞれ栄転しました。宍戸教授は平成24年(2012)3月に定年退職し(現名誉教授)、日本薬学会賞を受賞しました。

・海洋環境資源研究室

海洋環境には多くの未知の天然資源が豊富に存在しており、特に海洋生物由来の成分同定や構造決定、それらの合成を目指した研究室として、筑波大学から楠見武徳博士が初代教授に着任しました。後に東京水産大学から着任した大井高准教授とともに、精力的な研究教育活動を展開し、15年の間に多くの研究業績を残し、また多くの卒業・修了生を輩出しました。楠見教授は平成20年(2008)3月に定年退職しました(現名誉教授)。大井准教授は平成24年度(2012)に、現在の総合薬学研究推進分野へ配置換になりました。

・環境生物工学分野

平成5年(1993)に二木史朗助教授が、平成6年(1994)に丹羽峰雄教授が着任して、イオンチャネルタンパク質に関する研究など、生命科学基盤の研究を展開しましたが、二木助教授は平成9年(1997)に京都大学化学研究所に転出(その後、教授昇任)、丹羽教授は残念ながら平成10年(1998)に逝去されました。

センター改称と現在の研究分野

薬学部の教育カリキュラムが6年制になるなど、時代の大きな変化の中で、本センターがより進化した創薬拠点になるよう、平成18年度(2006)からセンターの名称を「**医薬創製教育研究センター**」に改称しました。現センターでは、時代のニーズに向けた新たな創薬と育薬研究を推進するとともに、「力量ある創薬・育薬研究者の育成」を目指しています。

・有機合成薬学分野

宍戸教授の後任には、難波康祐博士が平成25年(2013)に北海道大学から着任し、様々な有機合成反応の研究開発を進めるとともに、植物の鉄イオン吸収に関わる分子機構を解明してアルカリ性不良土壌の緑地化を目指しています。その詳細については、本パネル下の研究紹介をご覧ください。

・生物有機化学分野

平成21年(2009)に北海道大学から南川典昭博士が教授として着任し、平成24年(2012)から分野の名称を生物有機化学に改称しました。現在は、田良島典子准教授らとともに、DNAやRNAを創薬標的とした核酸医薬品の研究開発に取り組んでいます。

・創薬生命工学分野

平成11年(1999)に東京都臨床医学総合研究所から伊藤孝司博士が教授として着任しました。平成17年(2005)に分野の名称を創薬生命工学に改称し、同年には辻大輔助教が着任しました。遺伝子疾患であるリソソーム病の分子病態解析から、酵素補充などによる創薬と新規治療法の開発研究を中心に、およそ23年の間に数多くの研究業績を挙げ、また多くの学部生・大学院生がこの分野から巣立ちました。伊藤教授は平成21年(2009)からセンター長を務め、令和5年(2023)4月に定年退職しました(現名誉教授)。また辻助教は令和4年3月に退職、安田女子大学に転出しました。